シノドスへの歩み　みことばと共に
年 間 第 十 八 主 日 C 年

小西広志

2022 年 7 月 31 日

朗読箇所

第一朗読 コヘレト 1 章 2，2 章 21-23 節
第二朗読 コロサイ 3 章 1 － 5、9 － 11 節
福音朗読 ルカ 12 章 13 － 21 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 7 月 31 日、年間第十八主日となっています。今日の三つの朗読をシノドス的教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

太陽の下

第一朗読は『コヘレトの言葉』からです。22 節の「太陽の下」という言葉に注目してください。新共同訳では「太陽の下」と訳された言葉はヘブライ語で「タハット・ハッシャーメシュ」だそうです。『コヘレトの言葉』の特徴的な表現で 29 回使われています。「タハット」は「〜の下で」を意味する前置詞です。「ハッシャーメシュ」は冠詞（「ハ」）と「太陽」を意味する「シェメシュ」の組み合わせたものだそうです。

「太陽の下」という表現には「この世で」とか「この世の価値観において」、あるいは「やみの支配の中で」という意味合いがあると思います。朗読箇所にはありませんが、1 章 3 節には「太陽の下、人は労苦するがすべての労苦は何になろう」とあります。ここから、コヘレトと呼ばれるこの書の著者が「太陽の下」ではない世界を知っていることがうかがえます。つまり永遠の世界、あるいは神の支配の視点からこの世を眺めているのです。神の支配から見ているから「太陽の下」で生じるものを労苦とみなすのです。もし、神の永遠の支配を知らなければ、コヘレトの言う「何という空しさ」（1 章 2 節）は簡単に「ニヒリズム (虚無主義)」になってしまいます。そこにあるのは絶望でしかありません。しかしこの世の闇の世界が「空の空」(「ハヴェール　ハヴァーリーム」）であったとしても、「太陽の上」には決して失われることのない永遠のいのちの世界があることを指し示そうとしているのです。

たとえ話の説明

今日は第二朗読を省略して、イエスさまのたとえ話を少し丁寧に読んでいきましょう。今日の朗読箇所では、兄弟で遺産相続の争いをしている人からイエスさまが介入して欲しいとの願いがありました。イエスさまはその願いを断って、貪欲を戒めます（13-15 節)。「それから、イエスはたとえを話された」（16a 節）と導入の言葉があって、愚かな金持ちのたとえ話へと移ります（16b-20 節)。そして、道徳的な勧めで締めくくられます（21 節)。もともとのイエスさまの言葉、お話の部分はたとえ話の部分だけで、最初と最後は福音書の作者らによる付け加えだったのかもしれません。そこで、たとえ話のところだけを味わってみます。表題はわたしがギリシア語から直訳したものです。

16 節：だがたとえ話を彼らに（彼は）話した。「ある金持ちの人の土地が、豊かな実を結んだ。

ここでの「土地」はギリシア語で「コーラ」が使われています。これは、農地を表す「アグロス」とは異なって、広範な地域や地区を指す言葉だそうです。ですから、この金持ちが大きな町に住む大金持ちで、しかも不在地主であることが想像できます。「豊かな実を結ぶ」はギリシア語で「ユーフォレオー」ですが、大豊作や大収穫を表します。新約聖書ではここだけで使われています。

17 節：それで（その人は）自分自身の中で議論して言った。『どうしようか？私のこれらの収穫をしまう所を（私は）持っていない』。

大事なことは共同体のなかで時間をかけて議論して決めるのが当時のパレスチナの習慣だったそうです。ましてやこの物語の金持ちは、家族、家来、奴隷、小作人、パトロン、顧客などとの関わり合いの中で生きているはずですから、いろいろな仲間や話し相手、そして共同体を持っていたことがうかがえます。しかし、彼は「自分自身の中で」（エン・ヘアウトー)、「議論」（ディアロギゾーマイ）します。ここから誰も信用しない、共同体から離れた生き方がうかがえます。「しまう所」の「しまう」は「シュナゴー」ですが、「一緒に」を表す接頭辞「シュン」と「連れて行く」の意味がある「アゴー」からなる合成動詞です。「一つに集める」を意味します。

18 節：そして言った『こうしよう！（私は）これらの私の倉を壊して、もっと大きなのを建てよう。そしてそこに納めよう、私の全ての穀物と財産を』。

前節から見てみると、主語は「私」、つまり物語の主人公である金持ちです。「私はどうしよう」「私はしまう所を持っていない」、「私はこうしよう」、「私は倉を壊し、建てよう」、そしえ次節では「私は魂に言おう」（19 節）とあります。この金持ちは、「私」一人しかいない世界に生きています。彼にとって「私の全ての穀物と財産」だったのです。

「私の財産」の「財産」はギリシア語で「アガソス」ですが、「よいもの」を表す「アガサ」の複数形です。この金持ちにとって財産とは「よいもの」だったのです。

19 節：そして言おう、私の魂に。『魂よ、（あなたは）多くの年月をかけてきた多くの財産を持っている。休め、食べろ、飲め、楽しめ！』。

ここでの「魂」はギリシア語の「プシュケー」ですが、ヘブライ語の「ネフェシュ」に由来します。「ネフェシュ」は生きている人間の全体、体、心、力、知恵、意志などを含むその人そのもの、その人自身を意味する言葉です。この金持ちは、その人そのものである自分自身に「多くの財産を持っている」と語りかけるのです。しかし、前述の通り、この金持ちは不在地主です。多くの時間と労力をかけて財産を築きあげてきたのは小作人たちです。

「休め」はギリシア語で「アナパウオー」ですが、これは労働を一休みするという意味です。「楽しめ」は「ユーフライノー」ですが、自分が満足して楽しむ様子を表します。名詞形の「楽しみ」は「ユーフローン」です。この言葉の語源は「横隔膜」を表す「フローン」から来ます。古代の人々は知的ならびに霊的活動の「座」として横隔膜を考えていたそうです。横隔膜は人の「息」（「霊」と同じ言葉）の性質と強さを決定し、人の体の健康ばかりか、霊と感性の健康もつかさどると考えたそうです。たとえ話の中で、この金持ちは 16 節での「豊かに実を結ぶ」（ユーフォレオー）が「楽しむ」（ユーフライノー）とつながると考えていることがうかがえます。

20 節：しかし彼に言った、神が。『愚か者！今夜、あなたの魂を（彼らは）要求するのです、あなたから。しかし、（あなたが）備えた物は誰のものになるでしょうか？』

イエスさまのたとえ話は福音書の中にたくさん登場しますが、神さまが直接に語りかけてくるのはこのたとえ話だけです。「愚か者」は原文では「アフローン」ですが、先ほどの「横隔膜」を表す「フローン」に否定を表す接頭辞「ア」がついた言葉です。前述の「豊かな実を結ぶ」（ユーフォレオー）も「楽しむ」（ユーフライノー）も「フローン」に「良い」を表す「ユー」という接頭辞がついた言葉でした。この金持ちは「楽しみ」（ユーフローン）を求めたのに、神さまからいただいたのは「愚かさ」（アフローン）だったのはなんとも皮肉です。

新共同訳は「お前の命は取り上げられる」となっていますが、「取り上げられる」はギリシア語では「要求する、奪う」を表す「アパイトー」の三人称複数形の能動態です。「要求する」人々は、豊かな収穫物のために働いた農民たちと考えることも可能だと思います。

まとめ

少し長い説明で申し訳ありませんでした。今日の福音を「共生」、つまり「共に生きる」という観点から読めるでしょう。金持ちは「私の」という世界に生き、収穫物を分かちあうことはなかったのです。

また第一朗読の 2 章 21 節とも関連づけて読めるかもしれません。「労苦した結果を、労苦しなかった者に遺産として与えなければなら」なかったのは小作人たちでした。小作人たちこそ「空しさ」を生きた者たちなのです。その「空しさ」を「楽しみ」（ユーフローン）に変えてくださるのは神さまなのです。

先ほど申し上げましたように、イエスさま時代のパレスチナ地方では、事あるごとに共同体で一緒に考え、一緒に話し合い、一緒に議論して、結論を出したそうです。これはシノドス的な教会のあり方の前ぶれです。「共に生きる」とは「共に祈る」、「共に考える」共同体です。豊かな実りが豊かな楽しみだとしか考えられないこの金持は、「共に生きる」というダイナミックな生き方を忘れてしまっています。もしかしたら、この金持とは、21 世紀の日本を生きるわたしたちのことではないでしょうか。

それではまた来週。